

2025年12月27日

明日帰国を前に、
今日のセネガルでの想いを総括として書き残す。
アフリカで創造する責任。(長文)
我々なりに、セネガルで成すべきことを考え、推進する毎日だ。
セネガルにおいて、日本企業として寄せられる期待は決して小さくない。
そして、実現していく成果は、社内外を問わず、確実に評価の対象になっている。
先進国とは違い、電気や水道といったインフラも十分ではなく、機械も、前例すら存在しない環境。
それでも、
「これをやろう」
「こういうビジネスで、誰が助かるのか」
「この先には、こんな未来が待っている」
そう言って旗を掲げ、共に進もうと呼びかける。
実現までの道筋を、走りながら何度も練り直し、担当省庁とMOUを締結し、公式化し、公言する。
それは、自らに「有言実行の義務」を課す行為だ。
逃げたら、日本企業の名に恥じる。困難しかない茨の道を、右に行き詰まれば左へ、上が駄目なら地面を掘り、二手、三手と道を探しながら、毎日一歩でも前へ進む。
共通する夢とビジョン。
個々の夢や情熱。
それらのベクトルを合わせ、喜怒哀楽とともに、困難そのものを人生のイベントとして受け止め、思い出を刻みながら、一つ一つ実現していく。
途中、誰にも分かってもらえないこともある。
時間がかかることもある。
それでも、実現した先には必ず地元の笑顔がある。
第一歩が形になった時、「これが、そうか」と理解される瞬間が来る。
実際、難しいとされる公共教育分野でも、UNICEF経由でガンビア教育省に採用され、第二歩目の実現によって、三万人以上の先生と生徒がデジタル教育を受けられるようになった。
昨日は、保健省に勤める方々と意見交換をした。
医療現場ならではの、目から鱗の課題。
注意すべき点。

そして、奥地に行くほど、電気と通信がもたらすインパクトへの大きな期待。
教育分野で積み重ねてきた経験を、今度は保健分野に活かす。

不安は、ほとんどない。

それよりも、一日でも早く、一件でも多くの診療所に導入し、灯りのある診療
環境で、患者さんや妊産婦さんを安全に診てもらいたい。

諦めなければ、救える命があるかもしれない。そう考えて、心が震えない人は
いないだろう。

JICA民間連携、そして予定する保健省との連携。

公式化し、公言し、四年にわたる現場運用、官民連携、国際機関連携の実績を
背負い、実現しなければならない環境へ、自らを再び追い込む。

JICAすらもパートナーの一つとして巻き込ませていただき、

「母子の命を守りたい」という原体験からの目的へ、
ようやく官民連携での実現を、2026年に達成させる。

予定ではなく、目標として。

さらに、

アフリカ経済的自立の大きな柱として、

農産品のポストハーベストロス削減と加工輸出事業も進めている。

MOUの公式化、官民連携、大手企業との連携、加工出荷と日本での販売、
TICAD 9、セネガル投資フォーラムでの発表。

ここまでは、すでに済ませた。

あとは、実現するだけだ。

責務とともに。保健、教育、農業、保管加工、商業、雇用、納税。

地域と国の自立的発展。

二巡目では、

得た給与で出産費用や子どもの学費を払い、国や地域が自立的にすべての領域
を改善していく。

セネガルなら、セネガルらしく豊かになる循環型経済。

そうなれば、子どもを学ばせ、親自身も学び、効率の良い農業と商業が可能に
なる。

数を増やすより、一人一人を大切に育てたい。より良い環境を与えたい。

そんな親の想いも、きっと叶えられる。

爆発的に増えるアフリカの人口は、いずれ食料危機を招く。だが、人口増加を
抑え、食料生産に見合った保管と加工を自立的に行えれば、それは食料安全保
障にもつながる。

これらすべては、総合的なビジョンに包まれた世界の中で、電気と通信、ライ
フラインを整えていけば、必ず達成できることだ。

この取り組みは、
誰か一人の情熱や寿命に依存するものではない。
だからこそ、公式化し、公言し、官民連携と制度の中に組み込み、現場で回る
仕組みとして残すことに意味がある。
仮に、僕がいつかこの世を去ったとしても、
電気は灯り続け、通信はつながり、教育と医療と産業は、次の担い手に引き継
がれていく。
それが、僕個人に寄る意思ではなく、思想として行動原理として生き続け限り、
次世代に受け継がれ、続いていく。

#TUMIQUI #論語と算盤
#SUCRECUBE #Senegal
#シュークルキューブ



2017年に初めて太陽光パネルを未電
化村落に持ち込んだ様子の一枚。



2017年に初めて太陽光パネルを未
電化村落に持ち込んだ様子の一枚。



先生方は食い入る様に見てくださる。
そして、教育の現場でどう活かすか議論が
深まる。